

# 黒船ペリーの異文化戦略コミュニケーション ——幕末の食卓外交交渉——

御手洗 昭治

Dining Diplomacy in the Edo Period:  
Commodore Perry's Intercultural Strategic Communication

## Abstract

A pervasive notion is that immediately after Commodore Perry's black ships steamed into Uraga, the city of Edo (Tokyo) and the surrounding areas became in great tumult; in anticipation of war which seemed imminent. Historians at the same time have customarily charged Perry with arrogance, conceit and what-not in negotiating with the Japanese counterparts in Great Lew Chew (Okinawa) and in Kanagawa. Contrary to the aforementioned stereotyped images, Perry was imperious, and as Morrison put it, not imperialistic; firm, not arrogant; dignified not conceited. Above all, he was a master of so-called "dining diplomacy" and applied it into many instances in both Great Lew Chew and Kanagawa. The thrust of this paper is to delve into in what manner Perry executed his mission of opening of Japan through his proven diplomatic ability and how the Japanese officials treated Perry and his officers on official occasions in the context of intercultural strategic communication.

## はじめに

現役のメジャーリーグの大物野球選手が来日し、活躍し始めると、日本の新聞のスポーツ欄には決まって「黒船級の打者」現れると掲載される。平成元年に米国通商代表部（USTR）のカーラー・ヒルズ女史かなてこが来日し、「私は、鉄槌と握手で日本に貿易不均衡の是正を迫る」と記者会見で発表したと

き、日本の報道関係は一斉に「平成の黒船来航」と報じた。また、一九九六年に世界最大の文具・オフィス機器安売りチェーンである米国の「オフィス・デポ」が家電量販店ダイイチと提携し、日本で店舗展開を始めたときには「米から文具安売りの黒船来たる！」と、各紙の経済面で大きく取り上げられたことは、我々の記憶に新しい。<sup>1)</sup>

日本人がこの「黒船」という用語を使用するとき、それは未知なるもの、我々が到底かないそうにもないものというパーセプションやイメージが内包されているようだ。

石川好が述べるように、近代以降の日本列島の住民は「黒船」という名の不意に襲いかかってくる病気におびえながら——しかし、他方ではそれを待望しながら——生きてきたのかもしれないようである。<sup>2)</sup>また、そういう体質が我々にできあがったのは文字通り太平の眠りをさました、あのペリー（ペルリ）提督が率いた黒船であった。

従来から黒船来航に関する研究においては、ペリーと幕府側との遭遇や条約内容、江戸庶民の黒船に対する反応、それにペリーが日本滞在中に収集し本国へ持ち帰った植物や他の標本に関する研究が数多く存在する。しかしながら、ハーバード大学の歴史学者であるアルバート M. クレイグ教授は、「一つには、ペリー側と琉球側と幕府側の「戦略交渉」過程についてのミクロ的な研究がされていない事。二つ目には、ペリーと中国文化、琉球それに日本文化を異文化関係史の視点から扱った研究は無に等しいと言える。」と指摘する。<sup>3)</sup> 一般には、ペリーを魅了させた異文化的なものと言えば、「琉球島の風景の美しさ」以外、あまり存在しなかったと伝えられている。<sup>4)</sup>

小稿では、琉球側と幕府側がペリー艦隊一行をもてなした饗応、並びにこれまでは明らかにされてこなかった幕府側の用意した饗膳内容、加えてペリーが彼らをもてなした食卓外交に関して、異文化戦略コミュニケーションの視点から若干の考察を行いたい。

### 食卓外交と異文化戦略コミュニケーション

政界で「食を共にする」ということは、異文化間の戦略的コミュニケーションの視点から観れば、「親交ぶり」や「和解」の非言語的サインとなる。外

交の世界でもその重要さは同じである。米国人で最初に箸を使用して本格的な伝統的日本料理を味わったのは、ペリー提督と彼の部下である。

ペリーが嘉永七年（一八五四年）の二月十日にアメリカ軍楽隊を先頭に横浜海岸に華やかに上陸し、その直後彼の部下である各艦長や士官、ウィリアムスなどの通詞ら八十人と共に駒形水神近くに急造された横浜応接所で、正式な日本料理による歓迎の饗応を受けた。しかし、この饗膳は一般にペリーと彼の部下にとって来日初の饗応と解釈されがちであるが、実際には一行は浦賀来航の一年前の一八五三年に、既に琉球の首里城で来日初の「饗応」を受けていたのである。以下では、まず琉球におけるペリーと遠征隊の異文化接触の様子を中国の食文化にも比較させながら探求することから始めたい。

### ペリーと琉球の食文化

一八五三年の五月二十七日に、琉球側は四隻の船で贈り物の一頭の牛、数頭の豚、一頭の山羊、数羽の鶏、鶏卵、それに野菜を持参しペリーの艦隊に近づいた。しかし、ペリーは彼らの申し出を固く拒否し、彼らの乗船も許可しなかった。しかし、同月二十九日にコンテイ大尉とウィリアムスに那覇の市長を訪問させた。市長は贈り物が拒否されたことを残念がっていたのでコンテイ大尉は、かかる場合には贈り物を受け取らないのがアメリカ政府の慣例であって、決して無礼な振る舞いをするつもりがなかった事を伝えた。三十日には、琉球王国の行政長官が部下一人を連れ旗艦を来訪。彼らは艦長室に通された後、艦内を見物した。彼らは相当の好奇心を抱いており、警戒心も明白であったが終始落ち着いて厳粛であった。その後、今度は那覇の市長がペリーに対し、六月二日の午後二時に宴を張ることを打診するが、ペリーは出席しないことを告げる。ペリーは琉球側の嘆願書を受け取り、その後、返書を琉球側に手渡し首里城を訪問した。

ペリーの遠征日記には、琉球における饗応と異文化としての琉球の様子が次のように記述されている。

「隊列を構成するのは海兵隊二個中隊であり、大砲二門のほか、サスケハナ号とミシシッピー号の楽隊および軍楽隊が先導する。これにさらに四十名ほ

どの士官が加わった。

行列の練り歩く曲がりくねった道は、両側を立ち木や花咲く灌木に縁取られている。これほど美しい行列はまたとあるまい。〈中略〉王宮は高く分厚い外壁に守られていた。その外壁に切られた正門をくぐった後、さらにいくつかの門を抜けて、ついに王の居館の前に出た。』

その後、ペリー一行は謁見の間に入り、非常に丁寧に迎えられた。そこにいたのは摂政のほか、王国財務官・親雲上（ペーテン）であった。何ヤードか歩いた後、見事な建物に案内され、摂政の儀式用の広間に通された。ほどなく、何十（十二）という皿数の山海の珍味が並び始められた。「料理は肉、魚、野菜、果物の御馳走で、主に肉の煮物またはスープの形で小さなお椀で供された。それと共に、非常に小さな器に入った「酒」と、大きさは普通であるが受け皿のないカップに入ったお茶が出た。お茶は非常に薄く、砂糖もミルクも入れずに飲んだ。」

ペリーが中国人と日本人の文化慣習や気質などの相違について、明確な区別を行うことができなかったことは、「遠征日記」を一読すると随所に読み取れるが、こと食文化について、ペリーは両文化の相違を次のような表現で比較、対照している。

As to the culinary skill that had been employed in preparing the regent's feast, they were certainly dishes of the composition of which the guest were ignorant, but still they were, in general, savory and very good; much more so than those presented by Chinese cookery.... (The Lew Chewans) were ready enough to drink, on private account, without any stately formality, as the *sake* circulated freely during the eight courses of soup. When the Commodore supposed the soldids were about to appear, he rose....<sup>5)</sup>

「料理は実に素晴らしく、中国料理よりも美味だと思った。新しい料理が出てくるときに、主人たる摂政と同僚の高官たちが客にお辞儀をする。これは我が国で祝杯を挙げる作法と同じであることが解った。すべての料理をどうにか平らげ、スプーンほどもない小さな器の酒で何度も祝杯を挙げた後、私は立ち上がった。」（尚、日・中・琉の三つの食文化に関して、「食という面で

は、日本や中国よりはるかに琉球のほうがすぐれていると思う」と再度強調している個所も記録されている。)

またペリーは、那覇で初乗りした馬と駕籠について興味深い観察を行っている。

「摂政と三人の親雲上に送られて都の門まで来ると、そこで正式に別れの挨拶を交わした。兵たちを整列させて、来た時と同じように帰路に着く。ここで付け加えておくと、私の乗った馬は非常に小型であったが、姿は美しく、よく世話をされているようであった。この馬と駕籠(かご)——駕籠というのは輿(こし)の一種のようだが、天井がたいへん低いので脚を組まねばならず、非常に乗り心地が悪い——駕籠かきたちが私自身と士官数名のために用意された。」

#### ペリーの琉球側に対しての餐応

琉球寄港から一ヶ月後の六月二十八日に、ペリーは琉球の行政官と財務官をサスケハナ号上の晚餐に招待した。晚餐会の当日には、彼らをブキャナン艦長が出迎え、艦内を案内した。水兵達は武装し、音楽隊の演奏の下に欧米風の晚餐会が行われた。彼らは欧米風の礼儀作法を知らず、多少当惑していたのである。

晚餐は非常に立派なものであった。ペリーは世界各地の酒を振るまっただが、賓客にはオランダのジンが最も高く評価された。食事が済むと、彼らは煙草(タバコ)を吸わせてくれとペリーに頼み、その代わりに自分達の煙草を差し出した。

メロンとバナナは行政官と財務官を夢中にさせ、彼らは自分達の妻にそれらを土産として持ち帰る事を願い、上衣の一部をポケットがわりにして一杯詰め込んだ。今や他人行儀は完全に消え、賓客は大変満足していたが、行政官だけは少々不安の様子であった。アメリカのお茶という名目で、「コーヒー」が支給されたが彼らは無関心で、むしろ煙草に夢中であった。こういう和やかな雰囲気の中で饗宴は終わったのである。<sup>6)</sup>

## 横浜におけるペリー提督一行の饗膳

嘉永七年（一八五四年）二月十日に、ペリーは軍楽隊を先頭に横浜港に上陸した。ペリーを始めとする八十名の一行は、駒形水神側に急造された「横浜応接所」（条約館）で、今度は正式な日本料理による歓迎の饗応を受けることになるのである。「武洲横浜於応接所饗応之図」<sup>6)</sup>によれば、「饗応料理」は式三献（三三九度）の酒宴儀礼を伴った「本膳料理」であったという。これは、「ハレの饗宴料理」で、王朝の饗膳を基にして、室町時代に誕生したものである。本田総一郎によれば、江戸の食文化が花開いた文化・文政を経て高度に洗練され、今日の婚礼料理などに文化伝播されている。

横浜応接所では、嘉永七年三月三日に交渉の結果「日米和親条約」が調印され、その後、ペリー一行には祝宴の日本料理が幕府から用意された。また幕府側も調印前に林大学を始めとする一行が、ペリー提督から招待を受けたのである。ここでは新資料に基づき、横浜におけるペリー提督一行の初の横浜上陸に際して、幕府側が用意した食卓外交の様子を探ってみたい。

日本側が横浜でペリー提督一行に用意した「饗膳」は、百種類に及んだ。通常、「本膳」と言えば、二汁五菜というのが建前である。しかしながら、実質は二汁七菜で、その内容は実に多様である。料理の中身は、早春の江戸湾、相模湾、房総海岸で採れた地回り品でかため、産地、品質、鮮度の吟味を重ね、選び抜いた新鮮な魚類、山菜類など百点の材料が用いられた。では献立にはどのようなものがあるのであろうか。献立としては、「吸い物」、「汁」、「なます」、「刺し身」、「焼き物」、「煮物」、「蒸し物」、「練り物」が次々に供される。その中でも、魚の王様といわれる「鯛」が重宝がられたのである。

特に、大鯛の「姿焼き」や鯛の「ひれ肉の吸い物」、「刺し身」、「洗い」、「煮物」「蒸し物」など六種の鯛料理は圧巻である。鯉に関しては「煮物」の一種だけだという。ちなみに、鯉は「祝い魚の王者」である。特に、室町時代には武家が「上がり鯉」を縁起を担ぐために珍重したのである。

以上の料理を中心に、日本側はペリー提督一行を丁重にもてなしたのである。費用にして二千両（一億円以上）は越えた。

「饗応料理」の際、ペリー一行を配慮して、幕府側は高足の塗りのお膳と椅子を用意した。また箸と共に、さじ（スプーン）も手配されたのである。ペ

リー側は慣れない箸の使い方を、日本の役人に身振り、手振りのノン・バル手段で教わりながら「饗膳」を味わったのである。<sup>7)</sup>

西欧料理の味覚に慣れていたペリー提督一行には横浜での魚を中心とした饗応の献立はどのように受け止められたのであろうか。まず、ペリー自身であるが、遠征日記では「われら一同、魚、汁、生菓子、果物、酒などのご馳走のもてなしに、一行は大変喜んだ。」と記録されてはいる。モリソンは著書“Old Bruin”の中で、幕府側の饗応については英文で次のような説明を加えている。

(After signing, Perry then presented an American flag to Hayashi, and fieldpieces to Ido and Izawa, Ôto evidence our intention never to oppose your country.Ô) All then sat down to a Japanese feast, which has been frequently depicted in contemporary prints, complete with lengthy menu which included an entire fish for each convive.... With the Japanese CommissionerÔs permission, Commodore and his staff took long walks around Kanagawa, called on the mayors to exchange toasts in sake....<sup>8)</sup>

ところで、ペリーは日本人の料理方法を含む器用さには、かなりの関心を示しているが、魚中心の饗宴の食べ物には評価を与えていない。例えば、ペリーは「それはさておき、日本人の食べ物に関しては、大変結構とはいいかねる。見た目の美しさや豪華さやにどんな贅を凝らそうとも、日本の厨房は満足のものを生み出していないと言える。これは、我々の観察に基づくものであるが」。また、「条約調印の際に、日本側からもてなされた食事を基準にして、日本人の美食度や工夫などを判断してもよいとするならば…。」<sup>9)</sup>と記している。

### ペリーの幕府側への饗応

ペリーは一八五四年三月二十七日にポーハタン号上で、幕府側の七十名を招待し饗宴を持った。これは、日本側が条約後にもうけた饗宴の二日前にペリーが計画したものである。ペリーは、「私は苦勞をいとわず、この大勢の日本側の客を気前よく接待した。彼らの出した魚のスープと比べて、アメリカ人の歓迎とはどんなものか教えてやりたいと思っていた」と述べている。

本来であれば、外交上の友好の気持ちを表わすためにレセプションは入港時に行うのが常である。しかし、ペリーは交渉を有利に進めるためにも、また日本側の反応を探るためにも、あえて条約締結の寸前まで待つほうが効果的と考えたのである。ペリーは、フランスのバリ仕込みのcockを乗船させていた。このcockは、一週間夜も昼もなく働きニューヨークのデルモニコの料理にもひけを取らない多種多様な料理を準備した。ペリーは、交渉成功のあかつきにはこういう午餐会を開こうと考えていた。そのために牛や羊やさまざまな鶏を生きたまま飼っていたのである。これらに加えて、ハム、舌肉、保存用に加工した大量の魚や、野菜や果物を用いて山のような御馳走が作られたのである。これらの豪華な料理は、日本側のみならず艦隊の士官全員に振る舞われたのである。

むろん、シャンペンやワイン、日本人好みのリキュール、それにパンチも大量に用意された。当時としては、また艦上の不便さを考慮すると、今日の迎賓館やホワイトハウスで来賓に用意される料理以上とも言える。

多種多様の「酒」が用意されたわけであるが、これには次の理由があった。これは、ペリーは日本人と打ち解けたコミュニケーションをする場合には、コミュニケーション学者のディーン・バーンランドが使用した「飲コミュニケーション」、「Alcommunication」——日本人は酒を飲むとホンネで語り合える——を利用するに限るという事をも熟知していたのである。

ミンストレルズ（アフリカン・アメリカンの音楽隊）の催しもあり、饗宴は最高潮に達していた。アメリカ側も日本側もすっかり打ち解け「通商と農業は日米をますます結びつける」ことやカリフォルニアの金鉱やその他の魅力を話したりしていたところ「日本人は飲めるだけの酒をしたたかに飲んで、退席の用意をした」と記録されている。また、松崎万太郎は腕をペリー提督の体に巻きつけ「日本とアメリカの心は同じ」と日本語で繰り返した。一方、林大学は控えめに、すべての料理に手をつけ、数々の葡萄酒を飲んだが、彼だけは正気であったという。日本人が音頭を取り、甲板の一団がどんちゃん騒ぎを始めたため音楽隊の演奏を台無しにしてしまったのである。テーブル上にふんだんに用意された料理は瞬く間に消えてしまった。しかも、日本側の中には、ペリーが用意したお土産用のケーキや砂糖菓子以外の残りの料理



までも、身の廻りに詰め込んで持って帰ろうとする者もあり、アメリカ側はこれら日本側の外交面での無作法さを「ペルリ遠征日記」の記録として残しているのである。<sup>10)</sup>

### むすびとして

小稿では、琉球側と幕府側がいかなる食卓外交でペリー提督とその一行をもてなしたのか、また一方でペリーがいかなる方法で日本側に迫ったのかについて、異文化戦略コミュニケーションの視点から歴史資料を通して概観してきたのであるが、日本側が誠意を持ってペリーとその一行に饗応したにもかかわらず、ペリーにはその意図が通じなかったのである。

一般には、ペリーと日本側の条約交渉をかえりみる際、条約交渉は日本料理による歓迎の祝宴に始まり、調印の祝宴に終わったと伝えられている。しかしながら、これとは反対に琉球側や幕府側の方が、ペリーの催した饗応、すなわち「食卓外交」に圧倒されたのである。本稿では、ペリーが中国料理風の琉球の饗膳に比べて神奈川での献立表については絶大な称賛を与えていないことも明らかにされたが、これには次の理由が考えられる。

今から約百五十年前には、日本の食文化がまだ異文化において認識ならびに理解もされていなかったためである。今日のアメリカのみならず世界における日本食の普及を考えれば、今昔の感があるようだ。例えば、ペリー来航から数えて百五十年近く経った今日では状況が異なる。一九九八年、十一月二十日にクリントン米国大統領が来日した際、小渕首相は大統領の好物である「天ぷら」を、ある昼食会のメニューとした。クリントン大統領は箸を巧みに使い、日本酒を口にしたり天ぷらを味わった。大統領は首相自ら持参した清酒——大吟醸酒「大賞月桂冠」を賞辞したという。

外国には、接待側の客人に対する親近の度合い、客人の重要度は献立に投影されるという伝えがある。つまり晚餐そのものが、すぐれて外交交渉になるという意味である。その点において、幕府側がペリー側にとった饗応は異文化戦略コミュニケーションの視点から言えば、最良の結果を生まなかったのである。

尚、ペリーの食卓外交交渉と異文化戦略コミュニケーション力については、

今後一冊の著書にして論陣を展開してみたい。(〇98年師走)

注

- 1) 「米から文具安売りの黒船」日経、1996年9月9日。
- 2) 「黒船ショック、江戸っ子を走らす」日本放送協会、1989年5月26日放送。
- 3) Craig, Albert M. "Memorandum from Professor Albert M. Craig, a historian at Harvard, to the author dated October 13, 1993 & an Interview with Professor Craig at Yenchin Institute at Harvard on Oct. 10, 1992 and 御手洗昭治(1994)「黒船以前：アメリカの政策はそこから始まった！」第一書房、pp. ii - iii.
- 4) 御手洗昭治(1997)「黒船ペリーと琉米条約：異文化交流史の視点から」Journal of Intercultural Communication, SIETAR Japan, No. 1, p. 148.
- 5) Perry, C. M. "Supervised by Hawks, F. L. (1856). "Entertainment at the Regent's House" in United States Japan Expedition Vol. 1. Washington: Beverley Tuckher, Senate Printer.
- 6) 同上
- 7) Mitarai, Shoji(1998). 「武洲横浜於応接所饗応之図」、「於武洲久良岐郡横浜酒食賜墨夷之図」 in Research Note for Lecture on May 22, 1998: U. S. Japan Relations in the 19th Century., The Faculty of Culture Studies, Sapporo University.
- 8) Morrison, Samuel E. (1967). "Old Bruin": Commodore Matthew Calbraith Perry Boston: An Atlantic Monthly Press Book, Chapt. XXVI & pp. 380-381.
- 9) Perry, C. M. 前掲書、Peculiarities on the mission to Japan in Chapter XX.
- 10) 御手洗昭治、前掲書(1994) pp. 124-126.
- 11) 御手洗昭治、前掲書(1997)Journal of Intercultural Communication & (1996)「ペリーの対琉球交渉と白旗物語」札幌大学総合論叢、第2号、pp. 1-15.

(異文化コミュニケーション・交渉学／文化学部教授)